

中國小説史の研究

小川環樹

中國小説史の研究

小川環樹著

岩波書店

1968 東京

中国小説史の研究

昭和四十三年十一月二十九日 第一刷発行
昭和四十六年十月三十日 第二刷発行

定価 千円

著者 小川環樹

発行者 岩波雄二郎

発行所 株式会社 岩波書店
東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号

精興社印刷・複製本

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

序 文

本書の第一部は昭和二十三年から二十四年にかけて起草し、これを學位論文として京都大學に提出し、越えて二十六年、文學博士の學位を受けることができたものである。その内容はここに収録した所と大半は同一であるけれども、今回の印刷にあたり、誤字などを訂正したほか、第三章に補記を加え、第四章のみは一九五四年、日本中國學會報第六集に掲載のおり増刪したものを主として用いた。その他はほとんどすべて提出當時の原形に従ってある。故にこの第一部の第一章と第二章も諸種の雑誌などに掲載されたのであるが、いずれも原則として原稿を今回は用いることにした。第一部と第二部を通じ、すでに印刷公表したことのあるものにつき、その刊行年月をしるした一覽表を巻末に附する。それで明らかな如く、第一部の第三章のみは後半の概略を雑誌に發表したけれども、前半は今回はじめて印刷されることになる。第一部のあとがきも論文提出の當時のままである。

その「あとがき」で、私は提出論文すなわち本書第一部の内容を要約しておいた。そのとき以前および以後に雑誌その他に掲載發表した小説史に關連ある小論文數篇を第二部として收める。その大部分は第一部を補足するのに役だつはずであるが、それについては後に述べることとし、次に第一部執筆の動機と執筆當時の事情などを簡単に説明しておくこととする。

中國の小説に私が興味をいだいたのは少年のころからである。中でも「三國演義」の舊譯である「通俗三國志」をはじめ、「水滸傳」および「西遊記」みな江戸時代の譯が「有朋堂文庫」に收められていたのを愛讀し、何度となくくりかえし讀みふけた。馬琴の「八犬傳」「弓張月」「美少年録」などとどちらがさきだったかは、もう記憶しない

が、読みかえした回数恐らく「水滸傳」の方が多かったであろう。

これらの中國小説の原文を亡父は藏していた。それらを祖父の隠居所で一見したことがあったが、もちろん私が原文で讀めるはずはなかった。しかし中學時代の終りごろから舊制高等學校に進んだ年ごろには、父が主宰していた雜誌「地球」に「水滸傳の地理」などの雜文を書いたときの必要から、上海の新版を購入し、それにはいわゆる新式標點が加えてあって、段落を分ち、人物の對話の前後に「」をつけてあるなど、たいへん讀み易くしてあった。私はこの新版の卷頭に載せてあった胡適氏の「考證」を讀んだ。やはり白話文は、中國現代語を知らない私には、ほんの大づかみにしか分らなかつたのだが、非常に興味をそそられた。やがて「水滸傳」以外の新版を順々に買いこみ、どれにもたいい附いていた胡適氏の考證や解説を、むりやり讀んでいたのである。しかし本文には、なかなか齒が立たなかつた。

ちようどそのころ「國譯漢文大成」の中に「紅樓夢」が譯されていた。この小説の翻譯はたぶんそれが最初であろう。譯者は平岡龍城氏であつて、幸田露伴氏が處々に少しく注を加えたものである。私はたちまちこの小説の魅力にとりつかれ、これまたくりかえし讀んだし、それから胡適氏の考證によつて、作者の傳記なども知つた。青木正兒博士が「水滸傳」や「儒林外史」などにつき書かれた文章が雜誌「支那學」に載つたのも大いに興味をもつて讀み、水滸傳の百二十回本とよばれる版本が京都府立圖書館に藏せられることを知つて、借閱したのもそのころであつた。借りたと言つても、ただ本をひろげて、ながめただけであつたが。

その百二十回本と同種の版本が、京都の古書即賣會に出たのも、私の高校生ときだつた。父について見に行つた私はその本を手にとってみた。表紙は破れ、保存がいいとは言えなかつたが、父は全く氣をとめず、行きすぎてしまつた。歸宅後そのことを父に告げたら、「なぜ、すぐ言わない」と大いに叱られ、さっそく電話をかけてくれたが、

もう賣れたあとであった。その本は倉石武四郎先生に歸し、何年か後に見せていただいたことがある。本を買いそこなつたのはこれ一度だけではない。しかし、このようにして私は小説の讀者たるとどまらず、自分で氣がつかぬまに小説史の研究に興味をもち始めていたのであった。

昭和四年、大學に入り、初めて現代中國語の初歩を學び、これでようやく原文へ接近する途が開けた。三年生になり、卒業論文の題目を選ぶ際にも、あれこれ考えたすえ、やっぱり子どものころから最もなじみの深い小説史に關した事をもつた。譯本のすでに有るものでは勉強になるまいと、「儒林外史」を讀んでみることにきめた。當時ほとんど唯一の辭典であつた「井上支那語字典」をたよりに、それでもいっしょうけんめいに取っ組んで、字句の難な處は無數にあつたものの、夏休みの一個月あまりを費やして通讀できた。

錢稻孫氏の日本語譯が最初の一、二回分だけあつて「儒林外史」は全部で五十六回に分かれる。或る雜誌に載つていたのを貸していただいたり、倉石先生は當時京大助教であられたが、いろいろ親切な指導と助言を賜わり、そのおかげでその年の暮から三週間で卒業論文を何とか書きあげることができたのである。こうして昭和七年に大學を出、あくる年その論文を書き改めたものを小島祐馬博士のおすすめで「支那學」に發表させていただいた。今から見ると幼稚ではあるけれど、私が學問の世界に入った第一歩の記念として、第二部にこれを収録する。今回は引用原文に訓讀をつけ、假名づかいを改めただけで、ほかには手を加えない。

大學卒業後、私は中國語學に、ますます心をひかれるようになったけれども、二年間の中國留學を終え、歸國したさらに二年後すなわち昭和十三年に東北大學法文學部講師となつて仙臺に赴任した。そのとき、何を講義すべきかを仙臺から京都大學へ歸られた青木正兒教授にお伺ひした。先生は私の二三の提案を聞いておられたが、すぐ「君は小説をやりたまえ」と言われた。この一言で私は「清代小説」の講義をすることに決意し、着任してただちに準備を開

始した。清代を中心にするつもりではあったが、白話小説の起原にさかのぼる必要を感じたから、講義は宋代の俗語藝能の概略の説明から出發し、元明時代のおもな作品を解説し、清代の作品はあくる年にあらまし解説し、清末まで講義を打ち切った。この二年間、私は「文選」の講讀を加え、一週間に二科目の授業をしただけだから、時間の大半をこの講義のために使うことができた。前にも言った胡適氏の考證文をあらためて讀み、魯迅氏の名著「中國小説史略」を力にして、だいたいの計畫をたてた。魯迅氏の著書は京大在學中にすでに讀んでいたが、この年にはたえず座右に置いていたので、假綴の裝訂がぼろぼろになるほどであった。そのほか鄭振鐸氏の多くの論文、孫楷第氏の「中國通俗小説書目」など、中國で發表出版されたものには、できるだけ目を通すよう心がけていた。しかし當時の私は、それまでの學者の研究成果の吸收がせいっぱいで、いきおい講義そのものは平板な敘述に流れざるをえなかった。

昭和十五年三月にその講義を終わってからのち數年、私は新たに着手した中國文學史の講義の方に力をそそぐ必要ができ、さきの「文選」につづいて唐詩を讀むことに時間をうばわれ、小説のテクストを讀むひまはなくなつた。「金瓶梅」の如きも、十四年に大いそぎで一讀しただけで、そののちついに再度通讀することはなかった。

昭和十八年に桑原武夫氏が仙臺に轉任されたことは、特筆すべきことであつた。戦後の桑原氏の發表された評論が、日本の文學と評論に大きな反響をもたらしたことは周知のとおりであるが、戦後まもなく東北大學の中にできた小さなグループで、「小説の比較研究」をテーマとし文部省の研究助成金が與えられたとき、その計畫を立案し指導されたのも桑原氏であつた。このグループに私が参加できたことは非常な幸運であつて、ここで私は多くのことを學んだ。西洋の古典文學、英、獨、佛の小説はもちろん、遠くは世界最古の敘事詩といわれるシュメル人の「ギルガメシ」から近くは「宇津保物語」まで、話題の範圍は廣大であり、文學史の理論と方法についても、いくらかの知識をえた。

この研究會は毎月ひらかれ、桑原氏が京都大學人文科學研究所の教授として去られたのちも繼續し、二十五年、私自身も仙臺を去るまではつづいたのである。

この研究會から私の受けた恩恵については桑原教授ならびに當時の同僚の方々、有永、村岡、柴田諸教授に感謝しなければならぬ。そして恐らく最大の利益をえたのは私であつて、中國小説史を新しい角度から把えるきっかけができた。二十三年に京都大學で三十時間の連續講義をするよう命ぜられたのは當時京大教授であつた倉石先生であるが、その題として小説史を選ぶことに、今度は私も何のためらいもしなかつた。その年の夏休み、ほとんど毎日東北大學の研究室に居て準備したノートは、本書の第一部の骨子となつた。その秋の講義は前と違つて清朝まで進むことができなかった。

私の當初の計畫では少くとも「四大奇書」の全部にわたつて講述するはずであつた。この名は明末の作家馮猶龍（筆名は龍子猶）がつけたのだといわれるが、さきの三大小説に「金瓶梅」を加えたものである。すでに觸れた如く、私のこの小説に對する知識は最も淺い。また戦後の混亂期に研究室に置いてあつた私の藏書のうち盜難にかかつた少數の一つであつて、そのせいもあるが、この小説に正面からもう一度とりくむ氣が起らなかつた。しかも語學的に恐らく四大奇書中でも最も難解であるうえに、この中國リアリズムの極致とも言うべき書の有する意義を、どのような觀點でとらえ分析すべきか、私にはよい着想が浮ばなかつた。そのため不本意ながら二十三年の講義ではこの小説だけを除外する結果になつた。

序 文

この缺陷はあくる年にそのノートを整理して作つた學位論文にも、そのまま持ちこされたから、本書の第一部は依然としてその一章を缺いている。「あとがき」にもそのことを辯解してあるけれども、私の「金瓶梅」についての考へは、その後もいつまでたつても成熟しない。二十年後の現在になつても、私は「あとがき」で述べたような明代文

學史の研究を進め、その時代の文學の全部門を展望することが出来る日を待っていたが、實は今もってそこまで私は到達していない。

この問題の難點をすみじかに説明しておこう。私は第一章から第三章までで、「三國演義」の張飛、あるいは「水滸傳」の魯智深が代表する如き、無知で粗野な、天真爛漫とも言うべき無法者の人物形象が宋代以前にはなかった新しい文學の特色をなしたことを説いた。この考えをそのまま推しすすめることは出来るであろう。本書（四七ページ）にも引用した武田泰淳氏の「淫女と豪傑」の一文はその方向を示唆する。そこでは武勇無雙の豪傑たる武松むしゅうと不義の樂しみをほしのままにする淫女の潘金蓮はんきんれんとは同列におかれる。『この兩者には凡人に及びがたい徹底した性格行動がある。それがほかから動かせない絶対性をおびている。』『反省もない、ためらいもない、ただ生きて行くことの強さ、生きること、淫すること、殺すことの絶対性の前に、理窟や詠歎が無意義となる。その無意義化の完璧が天下の奇ではなかるうか。』武田氏の言われる行動の「絶対性」は理解できる。その行動が或る人物のその場に在っては他のことと置きかえない「絶対性」として描かれるとき、たとえば「水滸傳」(第二十三回)で武松が虎を殺す場面のように、理窟と詠歎ぬきで「完璧」な天下の奇文となる。金聖嘆と正岡子規が、その奇文を賞めたたえたのは故なしとしない。

しかし「水滸傳」の作者は行動の絶対性をそのまま寫し出して「天下の奇文」を造り上げたにも拘わらず、それに徹しきることはできなかった。そこにはたらいだ抑制作用については、第二章で論じたから、ここにくりかえすには及ぶまい。もしそれ武田氏の論法を進めて、「無意義化の完璧」を「金瓶梅」に觀るならば、この小説こそは「水滸傳」にもまして『反省もない、ためらいもない、ただ生きて行くことの強さ……淫すること……の絶対性』だけで、徹頭徹尾、一貫していると言えよう。そして、やはり四八ページ以下に言及した王陽明から出た哲學の一派、特に李

卓吾^{たくご}の思想、人はただありのままであれと教えたことを、この小説に結びつけるのは、全く牽強附會ではないかも知れない。李卓吾自身、かれ以前に作られていた小説「水滸傳」を読み、それを天下の奇文として賞賛したが、かれの思想によってこの小説が書かれたことはありえない。「水滸傳」の作者はかれが生まれるよりずっと以前に小説を書き上げたはずだからである。しかし李卓吾がこの小説に自身で言わんと欲したことが別の形で實現していると感ずたのと反對に、李卓吾一派の思想に共鳴をおぼえた或る文人が、その影響のもとに「金瓶梅」を書きおろした可能性は十分に有る。この作者は「蘭陵^{らんりやう}の笑笑生^{しやうしやうせい}」という筆名で書いた。その本名は恐らく永久に明らかにならないであろうが、その（現在知られる限りの）初版が刊行された一六一七年（萬曆四十五年）は、まだ李卓吾の死を去る遠くないあいだであった（卓吾は一六〇二年死）。

私が考えていたのはそこまでであって、それだけでは、まだこの小説を割り切れていない気がした。何かもう一別の觀念がはたらいているとは想われたが、それが何であるか、今もって私はさがしあてることができないでいる。結局、私はこの険しい山頂をきわめることに失敗して引きかえした登山者であった。

第四章に論じた所は、戦後まだ敦煌の「變文」寫本の全貌が知られていないうちに起草したものであるから、その後に出版公表された資料によって補うべき事は多いけれども、私自身の見解を改めるべき點はさほどないと思われる。ただし一九六四年、モスクワで開かれた或る學會で、この章の要約というべき短い發表を私がした際に、一人のロシアの支那學者から發せられた疑問は、中國俗語小説の起原を他國に求めなくてもよいではないか、國內で自發的に生じたと考へてはわるいのかというものであった。同じ疑問は讀者の方々にも有り得ると想われるから、一言だけ釋明しておきたい。

私はインド起原説を少しく強調しすぎたかも知れない。しかし私が力説したのは俗語小説の形式の起原であって、

それは語り物から出たに違いないが、語り物というだけならばどんな國にも存在し得た。ところが中國では書かれた説話は確かに早くから有ったけれども、書かれる以前にどんなふうにも口承されたかは知られない。魏晉以後の説話は断片的な各地の傳説を除外すると、道教や佛教と深い関係のあるものが多い。そして口頭文藝としての技法が明らかに知られるのは佛教から出た「變文」あるのみである。しかも韻文と散文の交互の反復を定型とする「變文」が、それ自身、唐代の俗語を用いており、その形式と技法は後世の民間の藝能に絶大の影響をおよぼしただけでなく、むしろそれら藝能の直接の祖先だとしなければならぬ。ほかに中國固有の何か有って、その形式をうけついでことを證するに足る作品は存しないからである。

ただ私が第四章を執筆し、また一九五四年に改訂するころにも、まだ思い到らなかった一事があった。それは最近、若い友人小南一郎君の立てた説であるが、漢代（正確には後漢中葉、一世紀ごろ以後）五言詩が文藝として發生したころ、この詩形の作品はしばしば物語の中に挿入されていたものが、その物語から分離して獨立の作品とされた場合があるだろう、というのである。これは傾聴すべき意見であって、魏晉以後、「古詩」とよばれる作品（主として五言詩）の中に、確かに物語の中に置かれるのがふさわしいと考えられるものがある。もしこの推測があたっているならば、口承説話の中間に五言詩が挿入され、その形式は變文によく似たものとなる。ただ變文における韻文の部分は原則として七言である点のみが異なる。だから一步を譲って言えば、變文そのものは明白にインド起原であるけれども、この形式を受け入れる素地は中國に在ったということになるであろう。將來、小南君の着想が十分に展開されるのを待つて、さらに討論したく思う。

第二部に収めた十篇は、いろいろな機會に發表した長短さまざまな論文で、第一章から第三章までは第一部の論旨

または考證を補う性質のものである。第四章が私の小説史研究の第一歩であったことは、すでに述べた。第五章はその餘波であった。第六章は最も新しく執筆し、富士正晴氏の新譯「紅樓夢」の解説にあてた。第七章は短いが、實はさきに述べた第一部の初稿である講義ノートでは唐代の文語小説と宋以後の白話小説の差異を論じた處で少し觸れた事がらを別の形で書いたものである。第八章は文部省の人文科學委員會主催の討論會で發表した内容の速記録を少し改削した。討論のために用意した要約もあらかじめ印刷して配布されたが、時間の制限があつて、要約どおりに話すことができなかったから、兩方ともここに収録する。第九章は、名古屋大學の佐々木理教授と加藤龍太郎教授の首唱で行なわれた共同研究の成果として刊行された書物の一部分をなす。研究の主題は「彼岸表象」であつたため、私の執筆した部分の原の表題は「中國の樂園表象」である。この約三年にわたる共同研究は各國の神話をおもな材料とした。すぐれた神話學者である佐々木教授を私は仙臺で知り、多くの教えを受けた。この一篇を草するにあつてルーマニアの宗教學者エリアーデ氏の著書をたまたま拾い讀みした私は、中國の神話にいくらか新しい見方ができるかも知れないと思つたが、非力で、ひそかに抱いた望みは達せられなかつた。そのときの共同研究の一部として、私は金田純一郎君(京都女子大學)の助力により、三世紀以降、唐代までの「仙郷に遊んだ説話」五十一篇を集め譯出した。この仕事には、のち川上義三君(大阪府池田高校)も手つだつていただき、その譯文は印刷されたのであるが、本書にはその序説として私の起草した小篇のみを第九章に収録した。第十章は、純粹に語學的な研究であるけれども、ここに附録しておく。章末に附記したように、東北大學の内田道夫教授を中心として行なわれた總合研究の成果の一部であり、私は同大學の莊司格一君の調査に助言しただけでなく、その結果の發表にあたり共同して執筆したので、その内容は二人の共同の見解といふべきである。

本書をこのような形で刊行できたのは一に玉井乾介氏の厚意による。同氏および岩波書店の編集部諸君に心から

感謝し、また挿畫圖版の寫眞撮影などに助力してもらった横山弘君と索引を作製された萩野修二君の勞を謝する。

昭和四十三年八月 京都にて

小川環樹

圖版の解説

一、(第一部第一章)

「三國演義」の版本は多数ある中で、ここには李卓吾批評と稱するものを天理圖書館の藏書より借照した。李卓吾先生批評の七字を表題につけた版本も一種ではない(第二部第二章を参照して頂きたい)。けれどもわが國の湖南文山の舊譯は、恐らくこの類のテキストを用いたと思われるから(同上参照)、掲出した。次の水滸傳とともに貴重な藏書の寫眞を貸與された天理圖書館の好意に對し深い感謝を申し上げる。

二、(第一部第二章)

「忠義水滸傳」と題する百回本も版本は多い。これは一と同じく天理圖書館の藏書より借照した。この寫眞には見えないが、容興堂の三字が版心に刻せられたところがある。容興堂刊本はわが國では内閣文庫に藏せられるものがある。これと同版の如く見えるが、字句の異同がある由である。「敍」は李卓吾の署名ある序文である。

三、(第一部第三章)

この西遊記も李卓吾評と稱する。見かえし(封面)に「心猿意馬」の四字の朱印をおす。百回本で卷を分たない。さし繪(圖像)の中で「君裕劉刻」の四字が人物の左上方に在ることに注意されたい。この類の刊本は内閣文庫・廣島淺野圖書館などにも藏せられるが、ここに借照した田中謙二氏(京都大學人文科學研究所)の藏本とは全く同じではない由、太田辰夫教授(神戸外國語大學)の研究がある(明刊本「西遊記」考、神戸外大論叢、一九卷一號、昭和四三年六月)。

四、(第二部第一章)

三國演義の毛宗崗批評本の初刻と考えられるもの(家藏)。見かえし(封面)に「孝友堂」の三字朱印がある。李漁(笠翁)の序文があり、「湖上笠翁氏李鮫之印」「白髮少年場」二つの印を刻してある。この版の後印本も世にあるが、序文を存しない場合が多い。

目次

序 文

圖版の解説

第一部 元明小説史の研究

第一章 「三國演義」の發展のあと……………三

附考一 「三國演義」における佛教と道教……………二四

附考二 「三國演義」の本づいた歴史書……………二六

第二章 「水滸傳」の作者について……………三五

附考三 魯智深とその類例……………五

附録一 「西廂記」原文……………七〇

第三章 「西遊記」原本とその改作……………七三

附録二 元本西遊記についての「朴通事諺解註解」の記事の原文……………一二二

第四章 變文と講史……………一二五

第一部 あとがき……………一四六

第二部 小説史にかかわる諸問題

第一章 「三國演義」の毛聲山批評本と李笠翁本	一五
第二章 關索の傳説そのほか	一六二
第三章 「水滸傳」の文學	一七三
第四章 「儒林外史」の形式と内容	一八一
第五章 「儒林外史」作者の佚詩など	一九八
第六章 「紅樓夢」略説	二〇三
第七章 白話小説の文體	二二七
第八章 中國小説におけるリアリズム	三三〇
第九章 神話より小説へ —— 中國の樂園表象 ——	三三七
第十章 古小説の語法——特に人稱代名詞および疑問代名詞の用法について	三七四
各章を掲載した雑誌等の刊行年月の一覽	三九三

索引